

感動詞の表記の変遷に関するノート（４） ——1970年代から2000年代の文芸について——

石川 創*

Notes on the way of describing Interjections in Japanese (4) -About Literature from the 1970s to the 2000s-

So ISHIKAWA*

【キーワード】 感動詞・平仮名・片仮名・特殊拍・長音符

1. はじめに

筆者はこれまで、字種を中心とした感動詞の表記の変遷について、以下の3点に渡って調査・考察を行ってきた。

- ・石川創「感動詞の表記の変遷に関するノート（１）——洒落本・人情本および明治・大正期の文章について——」（『駒沢女子大学研究紀要』第26号，2019年12月）
- ・石川創「感動詞の表記の変遷に関するノート（２）——大正末期から昭和30年までのラジオ放送劇台本を資料として——」（『駒沢女子大学研究紀要』第28号，2021年12月）
- ・石川創「感動詞の表記の変遷に関するノート（３）——令和期におけるいわゆるライトノベルについて——」（『駒沢女子大学研究紀要』第29号，2022年12月）

以下、本稿では上記3点について、それぞれ「ノート（１）」、「ノート（２）」、「ノート（３）」の略称を用いる。

ノート（１）～（３）の要点を整理すると、以下ようになる。

ア. 江戸時代後期の洒落本・人情本において、

感動詞は8割以上が片仮名表記される。これは感動詞が話しことば的な要素と認識されていたことによる。

- イ. 明治初期の口語体の文芸では、9割前後の感動詞が片仮名表記され、1895年の雑誌『太陽』においても、5割超の感動詞が片仮名表記される。1909年以降の雑誌『太陽』や、1917年の雑誌『女学世界』における口語体の文芸、さらに大正末期から昭和30年のラジオ放送劇台本においては、8割前後の感動詞が平仮名表記である。
- ウ. 感動詞の平仮名表記が広まった大正後期においても、語末促音語形の感動詞は片仮名交じりで表記することが多く見られる。大正末期から昭和30年のラジオ放送劇台本において、促音は優位に片仮名表記されやすく、撥音は優位に平仮名表記されやすい。ただし促音も、大正期以前に比べると平仮名表記が進み始めている。
- エ. 令和期になると、ライトノベルにおいても感動詞の約95%が平仮名表記となる。片仮名表記によって音声的な要素を強調する

*人間総合学群 人間文化学類

ということはほとんどみられなくなり、長音における符号表記や小書きの母音表記が、音声的な要素の強調の手段となった。ただしこれはライトノベルという文体における特色の可能性もある。

近世後期以降の感動詞表記を通時的に観察するにあたり、これまでの調査では、昭和30年から平成期までの資料を対象にすることができていない。

そこで、本稿ではまず国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を用いて、1971（昭和46）年～2005（平成17）年の文学、その中でも多くの読み手に触れたベストセラーを対象として、感動詞の表記を調査し、大正末期から昭和30年までのラジオ放送劇や、令和期のライトノベルとの比較を行うこととした。次節で詳しく述べるが、今回の資料は、特段にジャンルを指定していないので、純文学、大衆文学、児童文学などが混在する資料である。昭和40年代なかば以降から、平成期なかばまでにおいて、文芸全般における感動詞の表記の特徴について明らかにするのが、本稿の目的である。

2. 調査資料・調査方法

本稿における調査資料は、前節で述べたとおり、国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』である。2023年8月9日に、同コーパスを、コーパス検索アプリケーション「中納言」を用いて検索した¹。検索条件は以下のとおりである。

オ。「品詞」の「大分類」を「感動詞」とした。

カ。「検索対象」を「特定目的・ベストセラー」の「非コア」とした。

キ。この検索対象における「ジャンル」として、「日本十進分類法（新）NDC」の「9文学（新）」と、「日本十進分類法（旧）NDC」の「9文学（旧）」にチェックを入れた。

オ～キの条件によって検索すると、6,232件の用例がヒットしたが、このうち以下の条件にあたるものを除外した。

ク。明らかに感動詞の用例として不適切なもの（指示代名詞の「あれ」、「～にあらあず」

の「あらあ」、「おいで」の「おい」など）

ケ。「な、何を」、「わ、私は」の「な」や「わ」といった、語頭の言いよどみ

コ。「いやいや」などは、「いや」の2例とするもの、「いやいや」で1例とするものが混在していたが、本稿では同じ語の重畳形は、どれだけ重なっていてもすべて1例とした（たとえば「いやいやいやいや」であれば、これで「いや」の重畳形による1例とみなす）。

サ。ノート（1）～（3）までにならない、「そう」（「そう」、「そうそう」、「そうですか」など）は感動詞から除外した。『現代日本語書き言葉均衡コーパス』では、基本的に「そう」を感動詞として扱わず、重畳形「そうそう」のみを感動詞と判定しているが、この「そうそう」も本稿では感動詞の用例とみなさなかった。

なお、長音符等の符号は字種とはみなしていない。「おーい」は平仮名表記、「はーいッ」などは平仮名片仮名交じり表記の用例として認定した。

以上の条件に基づき用例を整理した結果、5,572件の用例が得られた。今回の調査で抽出された感動詞が掲載されていた書籍の書誌情報は、以下のとおりである（著者名五十音順）。

『城山三郎全集第1巻』（新潮社、1980年）／
『栗良平作品集第2集』（栗っ子の会、1988年）
／青島幸男『人間万事塞翁が丙午』（新潮社、1981年）／青木和雄、吉富多美『ハッピーバースデー』（金の星社、2005年）／赤川次郎『探

偵物語』(角川書店, 1982年), 『愛情物語 curtain call』(角川書店, 1983年), 『華麗なる探偵たちユーモア・ミステリー』(徳間書店, 1984年), 『三毛猫ホームズのびっくり箱ユーモア・ミステリー傑作選』(光文社, 1984年), 『三毛猫ホームズの幽霊クラブ長編推理小説』(光文社, 1985年), 『早春物語』(角川書店, 1985年), 『泥棒よ大志を抱けユーモア・ピカレスク』(徳間書店, 1985年), 『三毛猫ホームズの歌劇場長編推理小説』(光文社, 1986年), 『盗みに追いつく泥棒なしユーモア・ピカレスク』(徳間書店, 1987年), 『三毛猫ホームズと愛の花束ミステリー傑作集』(光文社, 1988年), 『三毛猫ホームズの騒霊騒動長編推理小説』(光文社, 1988年), 『三毛猫ホームズのプリマドンナミステリー傑作集』(光文社, 1989年) / 赤瀬川原平『老人力』(筑摩書房, 1998年) / 阿川弘之『米内光政上・下』(新潮社, 1978年) / 浅田次郎『鉄道員』(集英社, 1997年) / 安部公房『密会』(新潮社, 1977年), 『方舟さくら丸』(新潮社, 1984年) / 天樹征丸『金田一少年の事件簿1-4』(講談社, 1994-97年), 『金田一少年の事件簿上海魚人伝説殺人事件』(講談社, 1997年), 『金田一少年の事件簿雷祭殺人事件』(講談社, 1998年) / 有吉佐和子『和宮様御留』(講談社, 1978年) / 生島治郎『片翼だけの天使』(集英社, 1984年) / 池田大作『新・人間革命第1-8, 10-13巻』(聖教新聞社, 1998-2000, 2001-2004年) / 池田満寿夫『エーゲ海に捧ぐ池田満寿夫第一小説集』(角川書店, 1977年) / 池波正太郎『真田太平記1-18』(朝日新聞社, 1984-85年) / 石原慎太郎『弟』(幻冬舎, 1996年), 『老いてこそ人生』(幻冬舎, 2002年) / 磯村尚徳『ちょっとキザですが』(講談社, 1975年) / 市川拓司『いま、会いにゆきます』(小学館, 2003年) / 五木寛之『戒厳令の夜上・

下』(新潮社, 1976年), 『四季・奈津子上・下』(集英社, 1979年), 『凍河』(文芸春秋, 1976年), 『水中花』(新潮社, 1979年), 『生きるヒント自分の人生を愛するための12章』(文化出版局, 1993年), 『青春の門墮落篇上・下』(講談社, 1976・77年), 『蓮如われ深き淵より』(中央公論社, 1995年), 『他力大乱世を生きる一〇〇のヒント』(講談社, 1998年), 『大河の一滴』(幻冬舎, 1998年), 『人生の目的』(幻冬舎, 1999年), 『運命の足音』(幻冬舎, 2002年) / 伊藤栄樹『人は死ねばゴミになる私のがんと闘い』(新潮社, 1988年) / 井上ひさし『吉里吉里人』(新潮社, 1981年), 『腹鼓記』(新潮社, 1985年) / 井上靖『孔子』(新潮社, 1989年) / ロバート・ジェームズ・ウォラー; 村松潔訳『マディソン郡の橋』(文芸春秋, 1993年), 『スローワルツの川』(文芸春秋, 1994年) / 臼井吉見『事故のてんまつ』(筑摩書房, 1977年) / 宇野千代『生きて行く私上・下』(毎日新聞社, 1983年) / 江藤淳『妻と私』(文藝春秋, 1999年) / 円地文子『円地文子の源氏物語巻1』(集英社, 1985年) / 遠藤周作『深い河』(講談社, 1993年) / 大江健三郎; 大江ゆかり画『「自分の木」の下で』(朝日新聞社, 2001年) / 大沢在昌『氷舞長編刑事小説』(光文社, 1997年) / 大下英治『修羅の群れ長篇ドキュメンタリー・ノベル首領篇』(徳間書店, 1984年), 『修羅の群れ長篇ドキュメンタリー・ノベル怒濤篇』(徳間書店, 1984年) / 小川洋子『妊娠カレンダー』(文芸春秋, 1991年), 『博士の愛した数式』(新潮社, 2003年) / 奥田英朗『空中ブランコ』(文芸春秋, 2004年) / 角田光代『対岸の彼女』(文芸春秋, 2004年) / 片岡義男『メイン・テーマ』(角川書店, 1983年), 『メイン・テーマ part 2・3』(角川書店, 1984年) / 片山恭

一『世界の中心で、愛をさけぶ』（小学館、2001年）／加藤浩美『たったひとつのたからもの息子・秋雪との六年』（文藝春秋、2003年）／金原ひとみ『蛇にピアス』（集英社、2004年）／鎌田敏夫『新・里見八犬伝闇の巻上』（角川書店、1982年）、『新・里見八犬伝光の巻下』（角川書店、1982年）／唐十郎『佐川君からの手紙舞踏会の手帖』（河出書房新社、1983年）／北杜夫『どくとるマンボウ医局記』（中央公論社、1993年）／北野武『たけしくん、ハイ！』（太田出版、1985年）、ビートたけし『たけしの新・坊っちゃん』（太田出版、1986年）／木藤亜也『1リットルの涙難病と闘い続ける少女亜也の日記』（幻冬舎、2005年）／京極夏彦『塗仏の宴の始末』（講談社、1998年）／桐生操『本当は恐ろしいグリム童話』（ベストセラーズ、1998年）、『本当は恐ろしいグリム童話2』（ベストセラーズ、1999年）／ジェームズ・クラベル；宮川一郎訳『將軍上・中・下巻』（ティビーエス・ブリタニカ、1980年）／ウィンストン・グルーム；小川敏子訳『フォレスト・ガンプ』（講談社、1994年）／胡桃沢耕史『新・翔んでる警視7・8』（広済堂出版、1987年）、『翔んでる警視正長編痛快推理1』（天山出版、1988年）、『翔んでる警視正長編痛快小説2』（天山出版、1988年）／黒柳徹子『窓ぎわのトットちゃん』（講談社、1981年）／小池真理子『恋』（早川書房、1995年）／小林完吾『愛、見つけた小さな命の置きみやげ』（二見書房、1983年）／小松左京『首都消失近未来サスペンス巨篇上・下』（徳間書店、1985年）／ヨースタイン・ゴデル；池田香代子訳『ソフィーの世界哲学者からの不思議な手紙』（日本放送出版協会、1996年）／堺屋太一『峠の群像上・中・下』（日本放送出版協会、1981-82年）、『豊臣秀長ある補佐役の生涯上・下巻』（PHP 研究所、

1985年）／酒見賢一『後宮小説』（新潮社、1989年）／フランソワーズ・サガン；朝吹由紀子訳『愛と同じくらい孤独』（新潮社、1976年）／佐木隆三『復讐するは我にあり上・下』（講談社、1975年）／笹沢左保『明日はわが身人間ならば魂の開発を』（いんなあとりっぷ社、1981年）／さだまさし『精霊流し』（幻冬舎、2001年）／アレックス・シアラー；金原瑞人訳『青空のむこう』（求龍堂、2002年）／椎名誠『活字のサーカス面白本大追跡』（岩波書店、1987年）／シドニイ・シェルダン；天馬竜行英意和訳；紀泰隆日本語文章『私は別人上・下巻』『明け方の夢上・下巻』（アカデミー出版、1993年）／シドニイ・シェルダン；天馬竜行・紀泰隆訳『明日があるなら』（アカデミー出版サービス、1988年）、『時間の砂上・下』（アカデミー出版サービス、1990年）、『血族上・下』（アカデミー出版、1991年）、『真夜中は別の顔上・下』（アカデミー出版、1991年）、『血族新書版上・下』（アカデミー出版、1993年）／シドニイ・シェルダン；天馬竜行・中山和郎訳『ゲームの達人上・下』（アカデミー出版、1991年）、『明日があるなら上・下』（アカデミー出版サービス、1991年）／シドニイ・シェルダン；天馬竜行訳『星の輝き上・下』（アカデミー出版、1995年）、『神の吹かす風上・下』（アカデミー出版、1996年）、『天使の自立上・下』（アカデミー出版、1996年）、『女医上・下』（アカデミー出版、1998年）／シドニイ・シェルダン；木下望訳『遺産上・下』（徳間書店、1995年）、『氷の淑女上・下』（徳間書店、1997年）／篠田節子『女たちのジハード』（集英社、1997年）／司馬遼太郎『翔ぶが如く2・4・7』（文芸春秋、1976年）、『項羽と劉邦中・下巻』（新潮社、1980年）、『箱根の坂上・中』（講談社、1984年）、司馬遼太郎『アメリカ素

描』(読売新聞社, 1986年), 『韃靼疾風録上・下巻』(中央公論社, 1987年), 司馬遼太郎『この国のかたち1』(文芸春秋, 1990年), 『風塵抄』(中央公論社, 1991年) / 庄司薫『はくの大好きな青髭』(中央公論社, 1977年) / 白岩玄『野ブタ。をプロデュース』(河出書房新社, 2004年) / 城山三郎『毎日が日曜日』(新潮社, 1976年), 『黄金の日』(新潮社, 1978年), 『指揮官たちの特攻幸福は花びらのごとく』(新潮社, 2001年) / 鈴木光司『ループ』(角川書店, 1998年), 『バースデイ』(角川書店, 1999年) / 瀬戸内寂聴, 瀬戸内晴美『わが性と生』(新潮社, 1990年) / 瀬名秀明『パラサイト・イヴ』(角川書店, 1995年) / 妹尾河童『少年H上・下巻』(講談社, 1997年) / 外岡秀俊『北帰行』(河出書房新社, 1976年) / 高橋克彦『写楽殺人事件』(講談社, 1983年) / 高橋三千綱『九月の空』(河出書房新社, 1978年), 『こんな女と暮らしてみたい』(青春出版社, 1980年) / 高部知子『告白ハンパしちやっごめん』(ワニブックス, 1984年) / 高見広春『バトル・ロワイアル』(太田出版, 1999年) / 高村薫『レディ・ジョーカー上・下巻』(毎日新聞社, 1997年) / 田中康夫『なんとなく、クリスタル』(河出書房新社, 1981年) / 田中芳樹『創竜伝長編伝奇5・6・8』(講談社, 1990-92年) / 檀一雄『火宅の人』(新潮社, 1975年) / 陳舜臣『諸葛孔明上』(中央公論社, 1991年) / 筒井康隆『文学部唯野教授』(岩波書店, 1990年) / 津本陽『下天は夢か1-4』(日本経済新聞社, 1989年) / 天童荒太『永遠の仔上・下』(幻冬舎, 1999年) / 永井路子『北条政子』(講談社, 1978年) / 中沢けい『海を感じる時』(講談社, 1978年) / 中野孝次『清貧の思想』(草思社, 1992年) / 西村京太郎『上野駅殺人事件長編推理小説』(光文社, 1985年),

『急行もがみ殺人事件長編トレイン・ミステリー』(実業之日本社, 1987年), 『L特急たざわ殺人事件長編トレイン・ミステリー』(実業之日本社, 1988年), 『十津川警部の挑戦本格ミステリー長篇上・下』(実業之日本社, 1988年) / 西村寿行『犬笛』(徳間書店, 1978年) / 新田次郎『八甲田山死の彷徨』(新潮社, 1971年), 『聖職の碑』(講談社, 1976年), 『新田義貞上巻』(新潮社, 1978年), 『武田勝頼1』(講談社, 1980年) / 萩原葉子『尋麻の家』(新潮社, 1976年) / 林真理子『最終便に間に合えば』(文芸春秋, 1985年), 『不機嫌な果実』(文芸春秋, 1996年) / 日木流奈『ひとが否定されないルール妹ソマにのこしたい世界』(講談社, 2002年) / 平野啓一郎『日蝕』(新潮社, 1998年) / フレデリック・フォーサイス; 篠原慎訳; かわだやすし訳『ハイディング・プレイス』(フジテレビ出版, 1984年) / フレデリック・フォーサイス; 篠原慎訳『悪魔の選択下』(角川書店, 1979年), 『第四の核上』, 『ネゴシエーター下』(角川書店, 1989年), 『ネゴシエーター上』(角川書店, 1989年) / 深田祐介『新西洋事情』(北洋社, 1975年) / 福井県丸岡町編『日本一短い「母」への手紙一筆啓上』(大巧社, 1994年) / 藤沢周平『漆の実のみのる国上・下』(文芸春秋, 1997年) / ダン・ブラウン; 越前敏弥訳『ダ・ヴィンチ・コード上・下』(角川書店, 2004年) / 穂積隆信『積木くずし親と子の二百日戦争』(桐原書店, 1982年) / 丸谷オ一『女ごかり』(文芸春秋, 1993年) / オグ・マンディーノ; 坂本貢一訳『十二番目の天使』(求龍堂, 2001年) / 三田誠広『僕って何』(河出書房新社, 1977年) / 見延典子『もう頬づえはつかない』(講談社, 1978年) / 宮尾登美子『一絃の琴』(講談社, 1978年), 『天璋院篤姫上・下』(講談社, 1984年), 『蔵上・下』(毎日新

聞社, 1993年) / 宮部みゆき『理由』(朝日新聞社, 1998年), 『模倣犯上・下』(小学館, 2001年)『ブレイブ・ストーリー上・下』(角川書店, 2003年), 『誰か』(実業之日本社, 2003年) / 村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』(新潮社, 1985年), 『ノルウェイの森上・下』(講談社, 1987年), 『ダンス・ダンス・ダンス上・下』(講談社, 1988年), 『TV ピープル』(文芸春秋, 1990年), 『遠い太鼓』(講談社, 1990年), 『国境の南、太陽の西』(講談社, 1992年), 『ねじまき鳥クロニクル第1部・第2部』(新潮社, 1994年), 『スプートニクの恋人』(講談社, 1999年), 『神の子どもたちはみな踊る』(新潮社, 2000年), 『海辺のカフカ上・下』(新潮社, 2002年), 『アフターダーク』(講談社, 2004年), 『東京奇譚集』(新潮社, 2005年) / 森村誠一『人間の証明』(角川書店, 1976・77年), 『人間の証明長編推理小説』(光文社, 1977年), 『青春の証明』(角川書店, 1977年), 『青春の証明長編推理小説』(光文社, 1978年), 『野性の証明長編推理小説』(光文社, 1978年), 『悪魔の飽食「関東軍細菌戦部隊」恐怖の全貌! 長編ドキュメント』(光文社, 1981年), 『悪魔の飽食続』(光文社, 1982年) / 柳田邦男『犠牲わが息子・脳死の11日』(文芸春秋, 1995年) / 山口洋子『演歌の虫』(文芸春秋, 1985年) / 山崎豊子『不毛地帯1-4』(新潮社, 1976-78年), 『二つの祖国上・中・下』(新潮社, 1983年), 山崎豊子『大地の子上・中・下巻』(文芸春秋, 1991年), 山崎豊子『沈まぬ太陽2-5』(新潮社, 1999年) / 山崎洋子『花園の迷宮』(講談社, 1986年) / 山田邦子『結婚式』(太田出版, 1991年) / 山本一力『あかね空』(文芸春秋, 2001年) / 夢枕獏『闇狩り師ハイパーアクション』(徳間書店, 1984年), 『闇狩り師ミスター仙人・九十九乱

蔵 ハイパーアクション2』(徳間書店, 1984年), 『蒼獣鬼妄霊篇』(徳間書店, 1985年), 『蒼獣鬼異神篇』(徳間書店, 1986年) / Yoshi『もっと、生きたい…』(スターツ出版, 2004年), 『恋バナ赤・青』(スターツ出版, 2005年) / リリー・フランキー『東京タワー オカンとボクと、時々、オトン』(扶桑社, 2005年) / 連城三紀彦『恋文』(新潮社, 1984年) / J.K. ローリング; 松岡佑子訳『ハリー・ポッターと賢者の石』, 『ハリー・ポッターと秘密の部屋』, 『ハリー・ポッターとアズカバンの囚人』, 『ハリー・ポッターと炎のゴブレット上・下巻』, 『ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団上・下巻』(静山社, 1999, 2000, 2001, 2002, 2004年) / アレックス・ロビラ, フェルナンド・トリアス・デ・ベス; 田内志文訳『グッドラック』(ポプラ社, 2004年) / 渡辺淳一『くれなゐ』(集英社, 1979年), 『遠き落日上・下』(角川書店, 1979年), 『化粧上・下』(朝日新聞社, 1982年), 『ひとひらの雪上・下』(文芸春秋, 1983年), 『愛のごとく上・下』(新潮社, 1984年), 『化身上・下巻』(集英社, 1986年), 『別れぬ理由』(新潮社, 1987年), 『静寂 [しじま] の声乃木希典夫妻の生涯下巻』(文芸春秋, 1988年), 『うたかた上・下』(講談社, 1990年), 『失楽園上・下』(講談社, 1997年) / 綿矢りさ『蹴りたい背中』(河出書房新社, 2003年)

上記の書誌情報について、著者名、書名、出版社、出版年は、コーパス上に登録されているデータをそのまま引用した。ただし、「上巻」「下巻」のように分かれているものについては、『(書名)上・下巻』のようにまとめて示してある。

次節では、上記の資料に基づく5,572件の用例について、特に特殊拍の表記に焦点をあてて分析を行う。

3. 調査結果と分析

3.1. 年代別の字種の内訳

はじめに、1970年代から2000年代の各年代における感動詞の延べ語数と、表記における字種の内訳を示す。表1に結果を整理した。上段の数字は用例数、下段の数字は各年代の延べ語数に対する百分率（小数点第二位以下四捨五入、以下の表も同様）である。「他」としたのは、ノート（1）～（3）と同様に、「へ」を含む感動詞（「へえ」、「へへ」など）の用例である。印刷物では平仮名と片仮名の「へ／へ」の区別がつかないため、他の用例と区別した。

表1を見るに、年代ごとに有意なかたよりは見られず、約95%の感動詞が平仮名のみで表記されている。ノート（3）で調査した令和期のライトノベルでは、94.9%の用例が平仮名表記であり、ほぼ同様の傾向である。ノート（2）において、大正期から昭和30年までのラジオ放送劇脚本では8割前後の感動詞が平仮名表記されていることを示したが、1970年代（昭和40年代なかば）以降は、純文学、大衆文学、ライトノベルなどのジャンルを問わず、文芸において感動詞は95%程度の用例が平仮名のみで表記さ

れていると考えられる。昭和期・平成期のライトノベルや、令和期のライトノベル以外の文芸などの表記も確認する必要があるが、これらの資料においても、ノート（3）および今回の調査からかけ離れた結果が出るとは考えにくい。

3.2. 特殊拍の表記について

3.2.1. 特殊拍の表記に関する内訳

前項につづき、長音・促音・撥音を含む感動詞について、当該の特殊拍をどのように表記しているのかを調査した。その結果を整理したものが表2である。特殊拍を符号表記できるのは長音しかない（長音符「ー」。ごく少数「～」の用例もある）ので、促音と撥音においては、符号表記の用例は皆無である。

表1に見たとおり、そもそも感動詞の全用例の中で、片仮名表記が144例、平仮名片仮名交じり表記が13例しかないので、大部分の特殊拍が平仮名表記されるのは当然のことではある。しかし長音においては符号、促音については片仮名による表記が一定数見られる。これは、ノート（2）や（3）でも指摘した傾向である。以下、各特殊拍における表記の傾向について分析を行う。

（表1：年代別の感動詞用例数と字種の内訳）

年代	感動詞 延べ語数	平仮名	片仮名	漢字	平仮名 片仮名 交じり	平仮名 漢字 交じり	片仮名 漢字 交じり	他
1970年代	856	819 (95.7)	15 (1.8)	0 (0.0)	3 (0.4)	8 (0.9)	0 (0.0)	11 (1.3)
1980年代	1,897	1,796 (94.7)	60 (3.2)	1 (0.1)	6 (0.3)	7 (0.4)	0 (0.0)	27 (1.4)
1990年代	1,931	1,857 (96.2)	32 (1.7)	3 (0.2)	2 (0.1)	6 (0.3)	0 (0.0)	31 (1.6)
2000年代	888	837 (94.3)	37 (4.2)	0 (0.0)	2 (0.2)	1 (0.1)	0 (0.0)	11 (1.2)
計	5,572	5,309 (95.2)	144 (2.6)	4 (0.1)	13 (0.2)	22 (0.4)	0 (0.0)	80 (1.4)

(表2：感動詞の特殊拍に関する表記²⁾)

	当該の特殊拍を含む感動詞の延べ語数	特殊拍が平仮名表記	特殊拍が片仮名表記	特殊拍が符号表記
長音	2,455	2,257 (91.9)	9 (0.4)	207 (8.4)
促音	311	250 (80.4)	61 (19.6)	0
撥音	428	405 (94.6)	23 (5.4)	0

3.2.2. 長音の表記に関する特徴

はじめに、感動詞における長音の表記の特徴について考察する。長音の表記に関する年代別の内訳を示したのが表3である。

年代別にみると、2000年代に符号表記がやや多いことがわかる。ただし、63例のうち22例がJ・K・ローリング著・松岡佑子訳の『ハリー・ポッター』シリーズ、12例が白岩玄『野ブタ。をプロデュース』によるものであり、ふたりの作者（訳者）だけで全用例の半数を超える。長音符表記は、2000年代の特徴というよりは、特定の作品・作者によるかたよりとみる方が自然であろう。

ちなみに、ノート（3）で調査した令和期のライトノベルにおいては、長音の平仮名表記が74.3%、片仮名表記が1.0%、符号表記が28.3%であり、「長音を音声的な要素として表記する

にあたり、片仮名でなく、長音符を使用するというのは、現代の特徴」であると指摘した上で、「ライトノベルという文体によるところも大きい」と推測した（p.120）。特定のジャンルの文芸に限定しなかった今回の資料において、符号表記の割合が低いのは、この推測を裏付けるといえる。1970年代において、あとの年代よりも長音符の使用が少ないことから、文芸一般において、感動詞に長音符表記をする傾向が強まったのは、1980年代以降のことであるといえよう。

2000年代において、長音符を多く使用した作品のうち、『ハリー・ポッター』シリーズの翻訳に長音符が多いのは、児童文学であるために、低年齢の読者が親しみを持つことのできるようなそのような表記としたとも考えられ、ライトノベルと同様に、児童文学という文体の影響も考えられる。

(表3：長音の表記に関する年代別の内訳)

	長音を含む感動詞の延べ語数	長音が平仮名表記	長音が片仮名表記	長音が符号表記
1970年代	335	321 (95.8)	2 (0.6)	12 (3.6)
1980年代	756	701 (92.7)	3 (0.4)	63 (8.3)
1990年代	931	866 (93.0)	3 (0.3)	69 (7.4)
2000年代	433	369 (85.2)	1 (0.2)	63 (14.5)

ただし、『野ブタ。をプロデュース』は文藝賞受賞作かつ芥川賞候補作³であり、両賞の性格からすると、純文学とみなすのが妥当である。同作では「あーと」(フィラー)、「おーい」といった用例のほか、「うわ～」のような符号を用いる例もある。ノート(3)において、「『おーい、わーい、うーん』などはともかく、『まー、なーるほど、ありがとー』などの表記は、ライトノベルという文体によるところも大きいと思われる。」(ノート(3), p.120)としたのは、「純文学ではこうした表記をしにくい」という憶測を含むものであったが、同作の表記は、それを否定するものである。ライトノベル、児童文学、純文学、……といった区分と、長音符表記を結びつけることは、適切ではないかもしれない。

なお、片仮名表記はほぼ皆無であり、長音を含む感動詞が2,455例ある中で、長音が片仮名表記されるのは9例しかない。うち6例が語形全体が片仮名表記されるものであり、3例が平仮名片仮名交じり表記において、長音部分が片仮名表記されるもの(「あのォ」、「さァ」、「うわァ」)であった。ノート(2)で取り上げたように、昭和30年以前において、「あのウ、ふウン」などといった片仮名による小書きの母音表記は一定数見られるが、それは1970年代(昭和40年代なかば)以降においては、ほとんど使われなくなったということがいえる。ノート(3)で示したように、令和期のライトノベルでは、平仮名片仮名交じり表記において、長音が片仮名表記される例はひとつもない。

平仮名に着目すると、ノート(3)において、令和期のライトノベルでは長音において小書きの母音表記がされやすいということを指摘した。ノート(3)と今回の調査結果を比較すると、令和期のライトノベルでは、長音の平仮名表記593例中203例(34.2%)が、1970年代～2000年代の文芸では、長音の平仮名表記2,257例中49

例(2.2%)が小書きの母音表記である。両資料において、表記における字種の傾向が大きく変わらない中で、ライトノベルにおいて小書きの母音表記の用例が明らかに多い。これは、ライトノベルという文体の特徴とみなしてよいであろう。

片仮名表記によって長音という音声的な要素を強調するということは、さきの指摘通り、今回の資料(1970年代以降の文芸)ではほぼみられなくなっている。それにかわり、長音符表記や、昭和30年以前にはほとんどみられなかった平仮名による小書きの母音表記が行われるようになったのだといえる。

なおノート(3)で取り上げたとおり、長音符は平坦な発音を、小書きの仮名は下降のイントネーションをあらわすために用いられていると推定する先行研究⁴もある。しかしノート(3)にて、驚きの「ええっ!?!」のような、上昇調で発音される場面における小書きの母音表記の例をすでに指摘している。今回の調査でも、理解・納得をあらわす「ふうん」(サンプルID:OB6X_00161, J・K・ローリング著・松岡佑子訳『ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団下巻』)のような用例があった。この場合の音調は「ふ」のあとに上がる方が自然である。片仮名ではあるが、さきにあげた「あのォ」(サンプルID:OB1X_00173, 三田誠広『僕って何』)も、呼びかけの場面で使われており、この「ォ」は上昇調であろう。小書きの母音表記は、下降調をあらわすために用いられる場合も少なくないであろうが、それ以外の音調の場合でも用いられるのであり、「感動詞の音声的な要素を強調するための表記」とみなすのが妥当である。

3.2.3. 促音の表記に関する特徴

本項では、長音と同様に、促音の表記に関する年代別の内訳を示した上で、1970年代以降の

特徴について考える。表4に促音の表記に関する年代別の内訳を示す。

表4からわかることとして、どの年代にも、1割以上の片仮名表記がみられることがある。特に1980年代に片仮名表記の用例が多いが、34例のうち19例が、赤川次郎の9作品によるものであり、特定の著者によるかたよりの結果である。

平仮名片仮名交じり表記における、促音部分のみが片仮名表記となっている用例（「あッ」など）は、全年代を通じて6例（1980年代に5例、2000年代に1例）しかなかった。ノート（2）において、大正期から昭和30年代のラジオ放送劇脚本においては、「大正末期までにおいて片仮名表記されやすかった語末促音は、昭和期に入ると平仮名表記が進み、平仮名・片仮名表記

の割合が同程度となる」（p.53）ことを指摘したが、1970年代（昭和40年代なかば）以降においては、長音や撥音に比べると片仮名表記される割合は高いものの、その大半は語形全体を片仮名表記するものであり、促音部分のみを、その音声的な要素を強調するために片仮名表記するということはほとんど見られなくなっている。

3.2.4. 撥音の表記に関する特徴

長音と促音に続き、本項では1970年代以降の感動詞における撥音の表記の特徴について考える。もっとも表2に示したとおり、本稿の資料においては、撥音を含む感動詞において、その撥音が片仮名表記される例が23例しかない。年代別に撥音の表記を整理したのが表5である。

（表4：促音の表記に関する年代別の内訳）

	促音を含む感動詞の延べ語数	促音が平仮名表記	促音が片仮名表記
1970年代	36	32 (88.9)	4 (11.1)
1980年代	115	81 (70.4)	34 (29.6)
1990年代	110	96 (87.2)	14 (12.8)
2000年代	50	41 (82.0)	9 (18.0)

（表5：撥音の表記に関する年代別の内訳）

	撥音を含む感動詞の延べ語数	撥音が平仮名表記	撥音が片仮名表記
1970年代	73	72 (98.6)	1 (1.4)
1980年代	116	108 (93.1)	8 (6.9)
1990年代	121	118 (97.5)	3 (2.5)
2000年代	118	107 (90.7)	11 (9.3)

2000年代に片仮名表記の用例がやや多いが、11例中9例が、やはりJ・K・ローリング著・松岡佑子訳の『ハリー・ポッター』シリーズによるものである。応答詞の「ウン」が8例あり、特定の作者（訳者）の、かつ特定の語について見られたかたよりである⁵。

なお、撥音が片仮名表記であるものは、全23例中22例において、語形全体が片仮名表記であり、1例のみが平仮名片仮名交じり表記における撥音の片仮名表記であった（口ごもることをあらわす「あん」）。サンプルID:OB6X_00069, J・K・ローリング著・松岡佑子訳『ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団上巻』。

ノート（2）に述べたとおり、大正末期から昭和30年代のラジオ放送劇脚本においては、撥音を含む感動詞は9割以上の用例において平仮名表記されており、「うん」のように撥音部分を片仮名表記する平仮名片仮名交じり表記は1例もなかった。また、ノート（3）に述べたとおり、令和期のライトノベルでは、そもそも片仮名表記された促音が3例（「ノンノン、サンキュ、ゴホン」）しかなく、すべて語形全体が片仮名表記されたものであった。

ノート（1）において調査した江戸時代の洒落本・人情本においても、「ふん、うん」式の表記の例は皆無である。もっとも、洒落本・人情本では8割以上の感動詞が片仮名表記であり、平仮名片仮名交じり表記の用例は0.8%しかない。ノート（1）において、今野真二の論⁶を引用しながら指摘したとおり、江戸時代においては、話しことば的な要素を片仮名で書くことが行われ、基本的に感動詞は語形全体が片仮名表記されたのであり、特殊拍のみを片仮名で記す例は少ない。なお、同じくノート（1）で調査した明治・大正期の文章においては、感動詞の平仮名表記が進む中で、「ふん、うん」式の表記が13例ある。ただし、そのうちの10例が岩

野泡鳴「悲劇 魂迷月中双 一名、桂吾良」（『女学雑誌』第396、400-402号、1894年）のものであり、全体的な傾向とはいえない。

ノート（1）～（3）、および今回の調査結果を踏まえると、感動詞を表記するにあたり、撥音という音声的な要素を強調するために片仮名を用いるということは、明治期以降、ほとんどみられないといってよい。

4. おわりに

以上、本稿では1970年代から2000年代の文芸における感動詞の表記について、ノート（1）～（3）の成果と照らし合わせながら、調査・考察を行った。本稿の成果を整理すると、以下のようなになる。

シ. 1970年代から2000年代までの文芸と、令和期のライトノベルにおいて、感動詞の表記に用いられる字種の傾向にはほとんど違いがなく、約95%の用例が平仮名表記である。

ス. 長音について、昭和30年以前において一定数見られた片仮名による母音表記は、1970年代（昭和40年代なかば）以降においては、ほとんど見られなくなった。それにかわり、特に1980年代以降に、平仮名表記の感動詞において、長音符によって音声的な側面を強調することが広まる。ノート（3）では、令和期のライトノベルにおいて特徴的な傾向であったが、純文学に分類されるような作品において、長音符表記が多用されることもあり、文体との関連は強くなさそうである。同じく、令和期のライトノベルで特徴的であった小書きの母音表記による長音表記は、1970年代から2000年代の文芸にも見られるが、少ない用例にとどまる。

セ. 促音について、昭和初期から30年までは

語末促音を片仮名書きする例が半数程度見られたが、1970年代以降は2割以下となる。「あっ」などのように、促音部分のみを、その音声的な要素を強調するために片仮名表記するということはほとんど見られなくなっている。

ソ. 撥音については、1970年代以降、9割以上が平仮名表記されており、片仮名表記されるのは、語形全体が片仮名表記である場合にほぼ限られる。これは大正末期以降の傾向であり、感動詞の表記において、撥音という音声的な要素を強調することは、ほとんど見られない。

シにも述べたように、本稿の調査結果は、長音符の使用率を除くと、ノート(3)で調査した令和期のライトノベルと大きな違いがない。すなわち、1970年代(昭和40年代なかば)以降においては、令和期にいたるまで、感動詞の95%程度が平仮名表記されるのであって、「感動詞は平仮名表記するものである」という意識が極めて強い。江戸時代以降の平仮名片仮名交じり表記において、感動詞を音声的な要素とみなし、語形全体を、あるいは一部を片仮名表記しようとする意識は、昭和40年代なかば以降においては、ほぼ失われていることが分かる。その中で、長音符や小書きの母音表記などによって、音声的な要素を強調しようとすることが行われているわけである。

ノート(1)・(2)において、明治末期から昭和30年までの口語体の文芸やラジオ放送劇脚本においては、感動詞の8割程度が平仮名表記であったことを示した。それが1970年代以降の文芸では約95%になっている。「8割程度」が「約95%」に推移するのは、これまでの調査で扱っていない、昭和30年代から昭和45(1970)年のことだということになる。

「感動詞は平仮名表記するものである」とい

う意識が強く広まったのは、昭和30年代から40年代なかばのことではないか、ということが、ノート(1)～(3)、および今回の調査から導かれる推測である。

この推測について検証すべく、今後本稿を含めたこれまでのノートを踏まえ、昭和30年から45年までの文芸について調査を行い、近世後期以降における感動詞の表記の変遷について明らかにする。あわせて、ノート(3)と本稿においては、ライトノベルや純文学という文体の影響について言及したが、その影響を厳密に論じるために、昭和後期から平成期のライトノベル、また令和期の純文学や大衆文学についても、別途調査を行いたい。

注ならびに参考文献

- ¹ 国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』<https://clrd.ninjal.ac.jp/bccwj/>、およびコーパス検索アプリケーション「中納言」(データバージョン2021.03) <https://chunagon.ninjal.ac.jp/>。ならびに前川喜久雄監修、山崎誠編『講座 日本語コーパス2 書き言葉コーパス—設計と構築—』(朝倉書店、2014年)。
- ² 「うわあー」のように、長音が平仮名・長音符の両方を用いて表記されている場合があるので、長音については各表記の合計が延べ語数を上回る。表3についても同様。
- ³ 『デジタル大辞泉プラス』の「野ブタ。をプロデュース」の解説(JapanKnowledge Personal, <https://japanknowledge.com/psnl/display/?lid=5091001014870>, 2023年10月23日閲覧)による。
- ⁴ 金田純平「文字表現の音声学」(定延利之編著・森篤嗣・茂木利伸・金田純平『私たちの日本語』, 朝倉書店, 2012年2月)。
- ⁵ なお、本稿の調査で抽出された『ハリー・ポッ

ター』シリーズの用例においては、平仮名表記の「うん」も22例ある。

- ⁶ 今野真二『漢字とカタカナとひらがな 日本語表記の歴史』（平凡社新書，2017年10月）。

